愛知淑徳大学論集－文学部篇－　第44号　2019.3　143-159

「非外来語のカタカナ表記」研究の現状と今後の展望

Current Status and Prospects of Research
on *Japanese Non-loan Words Written in Katakana*

増　地　ひとみ
MASUJI Hitomi

キーワード：非外来語、カタカナ表記、現状と展望

1．はじめに

本稿の目的は、「非外来語のカタカナ表記」に関わる研究の現状を概観し、これまでの成果と課題とを整理した上で今後の展望を述べることである。

現代日本語の書き言葉においては、主に4種類の文字種―漢字・ひらがな・カタカナ・Alphabetが使い分けられる。これらの文字種間の使い分けに関しては大まかな基準が存在し、「カタカナは外来語を表記する」というのもその一つである。しかし実際には、その大まかな基準を外れた用法も観察される。外来語以外、つまり和語や漢語をカタカナで表記する用法はその代表的な例である。

和語や漢語のカタカナ表記は、先行研究において「非外来語のカタカナ表記」「非標準的なカタカナ表記」などと呼ばれ、現代日本語における使用実態が報告されるとともに、外来語以外にカタカナ表記が選択される理由や要因が数多く指摘されてきた。本稿ではまず、非外来語のカタカナ表記に関する先行研究を整理し、課題と合わせて概観する。そして、これまでに指摘されてきた要因を本稿独自の観点で分類した上で、今後の展望を述べる。

2．「非外来語のカタカナ表記」研究の現状

後で述べるように、和語や漢語のカタカナ表記、つまり「外来語以外のカタカナ表記」を表す術語は先行研究によってさまざまである。以下、本稿ではこれらを「非外来語のカタカナ表記」と呼ぶ。

「カタカナの研究」と言われる時、その「カタカナ」は外来語を意味するカタカナ語やカタカナ文字を指す場合もある。それらに関する先行研究も蓄積されているが、本稿では「カタカナ語やカタカナ文字に焦点を当てた研究」は対象としない。本稿が対象とするのは、「外来語以外（非外来語）」が「カタカナ文字で書かれて現れた表記」に関する研究である。つまり、「外来語を表記する」という大まかな基準を外れたカタカナ文字の用法を扱う研究である。非外来語がカタカナで表記される要因や仕組みの解明を明示的に目指す、あるいは視野に入れている

研究を含む。これらの先行研究が共通して目指す大きな目標は、非外来語がカタカナで表記される要因を明らかにし、要因同士の関わり合う仕組みと原理を解明することであると言えるであろう。

2-1．先行研究一覧

本節では、現代におけるカタカナ表記を中心に扱い、特に非外来語のカタカナ表記に言及している主な先行研究を発表年順に列挙して示す。カタカナに焦点を当てたものではなくても、漢語がひらがな・カタカナで表記される現象を扱った論考など、本稿の目的にかなうものは含めた。各々において指摘された要因については後でまとめて扱う。基本的な書誌情報に加えて調査対象を記し、各文献の冒頭に、のちに参照するための通し番号を付す。なお、No.29、31、34は特定の調査に基づくものではないため、調査対象の記載はない。

【表１】　「非外来語のカタカナ表記」に関する先行研究　　※書籍の場合は出版社名を（　）で記す。

No	著者	発表年	文献タイトル	掲載誌	巻号	掲載頁	調査対象
1	斎賀秀夫	1955	総合雑誌の片かな語	言語生活	46	37-45	総合雑誌
2	矢島芙美子	1968	女性向け広告文におけるカタカナ表記のことば	立教大学日本文学	20	85-94	女性向け月刊誌、週刊誌掲載の広告文
3	土屋信一	1977	現代新聞の片仮名表記	電子計算機による国語研究Ⅷ 国立国語研究所報告59		140-159	新聞
4	佐竹秀雄	1980	若者雑誌のことば―新・言文一致体（若者の言語空間＜特集＞）	言語生活	343	46-52	若者雑誌（情報誌・パロディ誌）
5	野村雅昭	1981	週刊誌のカタカナ表記語	馬淵和夫博士退官記念国語学論集(大修館書店)		847-865	週刊誌
6	吉村弓子	1982	現代日本語における漢字の表意性	言語学論叢	1	2-16	新聞、雑誌
7	佐竹秀雄	1989	若者の文章とカタカナ効果	日本語学	8(1)	60-67	若者雑誌、手書きの文章
8	柴田由紀子	1993	文体形成から見たカタカナの役割	花園大学国文学論究	21	22-34	小説
9	柴田真美	1998	現代のカタカナ表記について	学習院大学国語国文学会誌	41	12-20 (60-52)	主に新聞、雑誌。商業広告も含む
10	中山恵利子	1998	非外来語の片仮名表記	日本語教育	96	61-72	新聞
11	金城ふみ子	1998	「大学広告」におけるカタカナ表記語及びアルファベット表記語の使用状況―調査報告	早稲田大学日本語研究教育センター紀要	10	97-118	大学広告
12	金城ふみ子	1998	TIU新入生配布資料におけるカタカナ表記語使用の実態分析	東京国際大学論叢 経済学部編	19	95-117	大学の新入生向け配付資料
13	魏聖銓	1999	現代日本語のカタカナ使用の一側面―中吊り公告ポスターに用いるカタカナ語を中心に	外国語学会誌	28	103-121	電車内の中吊り広告ポスター、若者雑誌、新聞
14	佐竹秀雄	2001	新聞投書欄の片仮名表記―1999年の新聞3紙を資料として	武庫川女子大学言語文化研究所年報	13	5-17	新聞(投書欄)
15	堀江紫野	2001	カタカナ表記の研究―非外来語系を中心に	国文目白	40	16-24	90年代の小説、少女マンガ、青年誌、社説、コラム
16	成田徹男・榊原浩之	2004	現代日本語の表記体系と表記戦略―カタカナの使い方の変化	人間文化研究	2	41-55	一般紙4社が主催するWebサイト
17	堀尾香代子・則松智子	2005	若者雑誌におけるカタカナ表記とその慣用化をめぐって	北九州市立大学文学部紀要	69	35-44	若者雑誌
18	片田康明	2005	広告で見るカタカナ語について―食品販売店4社の食品広告を例として	天理大学学報	56巻2 (208)	151-159	新聞の折り込み広告
19	則松智子・堀尾香代子	2006	若者雑誌における常用漢字のカタカナ表記化―意味分析の観点から	北九州市立大学文学部紀要	72	19-32	若者を読者対象とした雑誌

No	著者	発表年	文献タイトル	掲載誌	巻号	掲載頁	調査対象
20	松田梨江	2007	外来語の変遷―新聞記事における外来語とカタカナ表記語	東京女子大学言語文化研究	16	115-132	新聞
21	喜古容子	2007	片仮名の表現効果	早稲田日本語研究	16	61-72	戦後の小説
22	臼木智子	2008	雑誌の片仮名表記―基準から外れる表記について	国学院大学大学院紀要.文学研究科	40	265-280	雑誌
23	中本美穂	2008	小学生向け媒体におけるカタカナ表記の規範と実態―国語教科書と学年誌を例に	教育学研究紀要	54 (2)	471-476	小学校国語教科書(光村図書)と学年誌(小学館)
24	生熊愛	2009	表記による意味の独立―語幹がカタカナ表記される動詞の傾向	国文目白	48	左45-左31	雑誌、漫画
25	奥垣内健	2010	カタカナ表記語の意味についての一考察―身体性とイメージの観点から	言語科学論集	16	79-92	Web、小説より用例を提示
26	李暁娜	2010	「切れる」と「キレる」に関するマインドマップ調査について	山口国文	33	84-69	アンケートへの回答(マインドマップと自由記述)
27	花田康紀	2011	和語・漢語がカタカナがきされるばあい	東京国際大学論叢.人間社会学部編	17	57-67	小説より用例を提示
28	五十嵐優子	2012	日本の社会とカタカナ表記	Mukogawa literary review	49	15-25	雑誌、新聞、テレビCM
29	茂木俊伸	2012	第5課「チョー恥ずかしかったヨ!」なカタカナの不思議	私たちの日本語 定延利之編著(朝倉書店)		47-57	-
30	柏野和佳子・奥村学	2012	和語や漢語のカタカナ表記―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における使用実態	計量国語学	28(4)	153-161	BCCWJ
31	笹原宏之	2013	漢語表記のゆれ	現代日本漢語の探究 野村雅昭編 (東京堂出版)		261-287	-
32	増地ひとみ	2013	Eメールにおける文字種の選択―非標準的な表記の背後に働く語用論的要素	待遇コミュニケーション研究	10	120-136	Eメール
33	増地ひとみ	2013	テレビ番組の文字情報における文字種の選択―番組のジャンルと語用論的要素に注目して	早稲田日本語研究	22	24-35	テレビ番組
34	矢田勉	2013	日本語の攻防 【文字・表記】 カタカナとひらがな	日本語学	32 (12)	82-91	-
35	柏野和佳子・中村壮範	2013	現代日本語書き言葉における非外来語のカタカナ表記事情	第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集		285-290	BCCWJ
36	村中淑子・黎婉珊	2013	中上級日本語教科書における非外来語のカタカナ表記の実態	国際文化論集	48	113-134	中上級日本語教育用教科書
37	吉田充良	2014	カタカナ表記による機能差異の表示―「適当/テキトー」を例にして	日本文学論叢	43	115-103	BCCWJ
38	金野美帆	2014	ファッション誌におけるカタカナの役割と表現効果について	玉藻	48	86-117	ファッション誌
39	柏野和佳子	2014	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』によるカタカナ表記語の研究	日本語学	33 (10)	98-103	BCCWJ
40	渡辺さゆり	2014	J-POP歌詞の中のカタカナ―AKB48	比較文化論叢,札幌大学文化学部紀要	30	70(49)-66(53)	J-POPの歌詞
41	柏野和佳子	2014	「コーパス」でさぐる和語や漢語のカタカナ表記の実態	日本語文字・表記の難しさとおもしろさ 高田智和・横山詔一編 (彩流社)		86-105	BCCWJ
42	増地ひとみ	2015	テレビCMの文字情報における文字種の選択―CMのジャンルと語用論的要素に注目して	早稲田日本語研究	24	13-24	テレビCM
43	増地ひとみ	2015	テレビ番組の文字情報における非標準的なカタカナ表記―「文字列への埋没回避」の観点から	国文学研究	176	82-67	テレビ番組
44	増地ひとみ	2016	日用品のパッケージにおける非標準的なカタカナ表記―表記の「流通」を中心に	早稲田日本語研究	25	1-14	日用品のパッケージ
45	増地ひとみ	2017	日本語教育で《非標準的なカタカナ表記》と《文字種選択の仕組み》を扱う意義―交通広告における調査結果を例に	日本語/日本語教育研究	8	123-138	交通広告
46	間淵洋子	2017	漢語の仮名表記―実態と背景	言語資源活用ワークショップ2016発表論文集		201-213	BCCWJ
47	増地ひとみ	2018	学術雑誌におけるカタカナの役割と使用実態―カタカナ表記で出現する語とコンテクストとの関連	国文学研究	184	105-91	学術雑誌

2-2．先行研究の整理（批判的検討）

本節では、表１で列挙した先行研究を、《調査対象》《調査の規模と方法》《使用されている術語》の観点から整理して批判的に検討し、課題と合わせて述べる。本稿の記述に対応する先行研究を、表１の各文献の冒頭に付した通し番号を用いて（No.2）のように示す。

2-2-1．調査対象

これまで非外来語のカタカナ表記の調査対象とされてきた媒体には、未だ偏りがある。現代日本語における書き言葉を調査・分析するにあたって調査対象となりうる文字資料は多岐にわたっており、多種多様である。表１「調査対象」欄に示したように、非外来語のカタカナ表記に関する調査研究が始められた当初は、雑誌や新聞を中心に調査と分析がなされた（No.1～７）。その後、1990年代以降は、小説や各種広告、漫画を対象とした論考も発表されるようになる(No.8、９、11、15など)。そしてインターネットの普及とともに、2000年代に入るとWeb上のテキストデータも調査対象とされるようになった（No.16)。そして最近では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）が整備され公開されたことに伴い、BCCWJを利用した調査研究も行われている（No.30、35、37など)。BCCWJは新聞、雑誌、書籍を広く対象とし、Web上のテキストも一部含んでいる。

しかしながらBCCWJは、人々の身近にあって個人の日常生活に密着した文字資料まではカバーしていない。現代日本語における表記の実態を把握し、表記主体（書き手）が文字種を選択する背景にある仕組みと原理を考察するためには、日常生活において表記主体が目にする文字を広く対象とした調査も必要である[1)]。筆者はそうした問題意識から、BCCWJに含まれておらず、しかし人々の表記意識に影響を及ぼしていると考えられる文字資料に焦点を当てて調査を行ってきた。Eメールやテレビ番組、テレビCM、日用品のパッケージ、交通広告である(No.32、33、42～45)。しかし一個人の調査には限界があり、BCCWJに含まれていない資料を広くカバーすることは到底なしえていない。筆者はほかに、学術雑誌を対象とした調査も行った（No.47)。学術雑誌などに代表される専門書は、多くの人が目にするものではない。しかしそれらも現代の書き言葉の一部であり、公刊されて流通している以上、現代を生きる日本語使用者の表記意識に何らかの形で影響を及ぼしていると考えられるからである。ほかにも先行研究においては、新聞の折り込み広告（No.18）やJ-POPの歌詞（No.40）を対象とした論考が見られるが、現代日本語における非外来語のカタカナ表記の実態を把握し、表記の選択に関わる仕組みと原理を考察するには未だ不十分である。

伝統的に調査対象とされ、現在ではBCCWJにも含まれる新聞、雑誌、書籍、そして一部のWeb上のテキスト以外にも、カバーすべき資料は多く存在する。例えばビジネス文書等の資料や、手書きの文字資料[2)]はその一例である。Web上の文字資料も膨大にあるものの、例えばSNSを調査対象とした論考はまだ見当たらない。スマートフォンの普及により人々の文字生活も大きく変化していると考えられ、LINEをはじめとするスマートフォン用のアプリで使用

される文字情報なども見逃せない。学術雑誌等の専門書への目配りも、さらに必要であろう。しかしながら、当分野の研究は今述べたような資料の種類と量とに追いついていないのが現状である。

2-2-2．調査の規模と方法

先行研究における調査対象の規模に関しては、大規模なものと小規模なものとが混在している。BCCWJを利用した調査[3]や、Webサイトを対象としてカタカナ表記語が含まれる181,356行を抽出したNo.16は、大規模な調査であると見なせるであろう。また、BCCWJが公開される以前にも国立国語研究所が大がかりな調査を行っている。例えば新聞を調査対象としたNo.3はその一部である。ほかにも、「総合雑誌およびそれと近い内容を持つ雑誌13種」の本文から24万語を抽出したNo.1は大規模なものである。週刊誌27種類から抜き出した2,700文を調査対象としたNo.5や、新聞3紙の投書欄から1年間にわたって合計5,295文を抽出したNo.14も比較的規模が大きいものと言える。

しかし、それらとBCCWJを対象としたものとを除けば、表1に掲げた先行研究は概して調査範囲が狭く、比較的小規模である。例えばNo. 8とNo.21の調査対象は、各々小説2作品と25作品である。No.18は新聞の折り込み広告計107枚を対象とする。ほかにも日本語教育用の教科書7冊（No.36）、電車の中吊り広告630枚（No.13）、ファッション誌3誌（No.38）など、幅はあるものの一個人が一定期間に扱える範囲に留まっている。筆者の行った調査も同様であり、Eメール14,583通（No.32）は筆者のパソコンに保存されていたものである。また、テレビ番組29本（No.33）、60本（No.43）など、世の中に流通している文字情報から見ると極めて狭い範囲の小規模な調査である。

無論、規模の大小にかかわらず、これらはいずれも現代日本語の一面を切り取って実態を記述しているという点で、全てが貴重な調査ばかりである。そもそもこれらの先行研究は、それぞれの著者が自身の問題意識に基づいて行ったものであり、こうして調査の範囲のみを総体的・相対的に見て批判される筋合いのものではないだろう。したがって、ここではあくまで「非外来語のカタカナ表記がなされる要因」と、要因同士の関わり、すなわち「表記選択の仕組みと原理」とを明らかにするという目的を軸に据えた場合に限定して総括的に述べるものであるが、表1の先行研究全てを合わせても、現代日本語における非外来語のカタカナ表記の実態を把握するには未だ不十分である。大規模な調査と小規模な調査の各々に利点と欠点があるが、現状では両者が相互補完していると見るには穴が多すぎる。文字情報の流通量が増加している現在、代表性を有するデータをどのように収集するのか、反対に収集したデータにいかに代表性を持たせるのかは今後の大きな課題である[4]。

調査方法に関しては、実際に出現している用例を収集して分析するという方法が主である。ほとんどの先行研究が、各々の調査目的に応じた資料（媒体）を選定し、そこに見られる実例を抽出・収集して分析するという方法を取る。

そのような中、アンケートによる意識調査を行ったのがNo.2、26、38である。しかしながら、No.2は1968年に発表された論文であり、その調査結果から今現在の実状を把握することはできない。また、No.26は特定の語（「切れる」と「キレる」）を、No.38はファッション誌における表記を対象としており、いずれも調査・分析の範囲は限定されている。先行研究で指摘されてきた数々の要因のうち、未だ推測の域を出ないものを裏づけるための意識調査や、非外来語のカタカナ表記が実際にどのように書き手（表記主体）・受け手によって生産・受容されているのかを明らかにするための意識調査が不足しているのが現状である。

2-2-3．使用されている術語

2章の冒頭で述べたとおり、本稿でここまで用いてきた「非外来語のカタカナ表記」という術語と同様の概念を表すのに、先行研究ではさまざまな術語や表現が使用されてきた。さらに、その指し示す範囲も異なっている場合がある。表1の各先行研究が使用する術語あるいは表現は2種類に大別でき、まとめると以下のようである。出典として、表1の通し番号を丸かっこに入れて示す。

①語種を基準とした術語・表現

「和語の片かな書き、漢語の片かな書き」(No.1)、「外来語以外の部分にもカタカナが用いられ」(No.4)、「漢語のカタカナ表記、和語のカタカナ表記」(No.5)、「非外来語の片仮名／カタカナ表記」(No.10、35、36、45、47)、「従来、外来語を表記するために用いたカタカナの役割とは違った、カタカナ語の新しい表記」(No.13)、「外来語以外の片仮名表記語」(No.14)、「非外来語系のカタカナ表記」(No.15)、「外来語でないのにカタカナ表記されている例／和語や漢語のカタカナ表記例」(No.16)、「通例片仮名によって表される語（片仮名語）」以外の「カタカナ表記語」(No.17)、「和語・漢語のカタカナ表記／和語・漢語のカタカナがき」(No.27)、「外来語」と「その他のカタカナ語」(No.28)、「外来語以外のカタカナ表記語」(No.29)、「和語や漢語（すなわち、非外来語）のカタカナ表記」(No.30)、「和語や漢語の非外来語のカタカナ表記」(No.39)、「和語や漢語のカタカナ表記」(No.41)、「外来語以外で片仮名表記される事象」(No.46)

②カタカナの役割・機能を基準とした術語・表現

「漢字を代行する片かな表記」(No.6)、「非標準的表記」(No.7、40)、「特殊なカタカナ表記」(No.8)、「いわゆる正書法から外れた表記」(No.9)、「通常カタカナ以外の文字で表記される日本語のカタカナ表記」(No.12)、「本来漢字やひらがなで表記される語をあえてカタカナで表記する非標準的表記としてのカタカナ表記／非標準的カタカナ表記」(No.19)、「非慣用的表記」(No.21)、「基準から外れる表記／基準外となる外来語以外の片仮名表記」(No.22)、「漢字や平仮名で書き表すことができるにもかかわらず、あえてカタカナを使用するもの」

(No.23)、「あえて行われるカタカナ表記」(No.24)、「カタカナの新用法（漢字表記が相応しくない、あるいは漢字表記との区別化を狙った自立語の表記）／新しいカタカナ表記語／カタカナの現代的用法」(No.34)、「非標準的な表記であるカタカナ表記」(No.37)、「非標準的なカタカナ表記」(No.32、33、38、42、43、44、45）[5)]

外来語以外がカタカナ表記された例を研究対象とする点においては全ての先行研究が一致しているが、外来語に加えて動植物名やオノマトペなどを「カタカナ表記される語」として認めるか否か、認めるならばどの範囲までかという点で先行研究による差異が存在し、術語には②に挙げたようなバリエーションが生じている。

②に見られる「非標準的な表記」やそれに類する術語を使用する場合は、何を「非標準」と見なすかが問題となる。例えば、No.34は「カタカナの新用法」「カタカナの現代的用法」などの表現を用いつつ、その説明として「外来語・動植物名・オノマトペ以外でカタカナ表記が多用される自立語」を提示している。ここに「標準／非標準」の物差しを適用するならば、No.34においては動植物名とオノマトペがカタカナで表記されるのは「標準」と見なされていることになる。この「動植物名」「オノマトペ」を標準と見なすかどうか、また、擬音語・擬態語等の区別なくオノマトペ全体を対象とするかどうかが、何を「標準／非標準」と見なすかの議論の分かれ目となるであろう。

また、②の中に限らず、例えば①に挙げた先行研究のうちNo.28は「外来語」と「その他」に二分しているものの、「その他のカタカナ語とは、漢語・和語・擬態語／擬声語がカタカナで表記されたもの」であると限定しており、カタカナ表記されたすべての語を単純に外来語とその他に二分しているわけではない。

以上のように、肝心の研究対象自体の捉え方や、対象を言い表す術語とその指し示す範囲が先行研究によって異なるため、比較がしにくいなどの問題が生じる。こうして、過去の成果を活用しにくい状況のまま今日に至っている[6)]。

2-3．文字種全般、文字種の選択に関連する研究

文字種全般、また文字種の選択に関する論考の中において、非外来語のカタカナ表記に言及される場合も多い。本節では、紙幅の都合上、それらのうちから一部を提示し紹介する。

漢字・ひらがな・カタカナ間での、いわゆる「ゆれ」を扱った論考や調査は多い。少し時を遡るが、ゆれの実態調査としては『現代表記のゆれ』（国立国語研究所報告75、1983）が代表的である。ただし、『現代表記のゆれ』は文字種間のゆれのみを扱ったものではないため、提示されている非外来語のカタカナ表記は少数である。最近では、小椋秀樹「コーパスに基づく現代語表記のゆれの調査―BCCWJコアデータを資料として」（『第１回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp.321-328、2012）などがあり、ゆれの実態が示されている。笹原（2013、表１－No.31）も漢語表記のゆれの条件を整理して示しており、それはそのまま漢語すなわち

非外来語がカタカナ表記される条件となるものである。また、NHKも2013年にゆれに関する調査結果を発表している（塩田雄大・山下洋子「“卵焼き”より“玉子焼き”―日本語のゆれに関する調査（2013年３月）から①」『放送研究と調査』63（９）、pp.40-59、2013）。調査項目の中には、わずかであるが漢字・カタカナ間のゆれに関するものが含まれる。

文字種の選択を含む表記行動の全体像を捉えようとしているのは佐竹秀雄である。1980年発表の「表記行動のモデルと表記意識」（『電子計算機による国語研究Ｘ　国立国語研究所報告67』pp.142-268、1980）以降、「表記」（『日本語と日本語教育のための日本語学入門』宮地裕編、明治書院、pp.187-204、2010）に至るまで「表記行動の枠組み」と「表記形式決定の過程」を示すモデルの改良が重ねられている。このモデルには、おのずと非外来語のカタカナ表記も含まれてくる。

２-４．その他―関連分野、周辺分野における研究

文字種の選択に関わる研究は、扱う資料等によってさまざまな周辺分野と関連してくる。例えば魏（表１－No.13）や増地（表１－No.45）が調査対象とした交通広告は、言語景観研究で扱われる対象の一つである。当然のことながら、言語景観研究における論考の中で文字種の選択や非外来語のカタカナ表記に言及される場合もある（代表的なものに染谷裕子「看板の文字表記」『現代日本語講座　第６巻　文字・表記』飛田良文・佐藤武義編、pp.221-243、2002など）。

心理学、情報処理、認知言語学の分野でも、文字種が選択されるシステムを明らかにしようとする研究が行われてきた（代表的なものに、海保博之・野村幸正『漢字情報処理の心理学』教育出版、1983など）。その目的は、さまざまである。例えば、インターネットで語を検索する場合には、表記によるゆれが生じる。それを軽減するための研究も存在する（例えば、福岡克「日本語表記の「ゆれ」と情報検索」『政策科学』５（１）、pp.85-96、1997など）。

ほかにも、各文字種による表記形態と単語のイメージとの関係を探る杉島一郎・賀集寛「表記形態が単語のイメージの鮮明性に及ぼす影響」（『人文論究』46（４）、pp.63-86、1997）や、岩原昭彦・八田武志「日本語書字における表記選択と情動情報伝達メカニズムについて」（『ことば工学研究会』第８回、pp.29-34、2001）、カタカナの文字そのもののイメージを扱う小松孝徳・中村聡史・鈴木正明「「ひらがなはカタカナよりも丸っこいよね？」―文字の数式表現および曲率の利用可能性」（『情報処理学会研究報告. HCI, ヒューマンコンピュータインタラクション研究会報告』2014-HCI-159（７）、pp.1-9、2014）などがある。これらも全て、非外来語のカタカナ表記がなされる要因を検討する上で有益な論考である。横山詔一「文字環境と単純接触効果」（『国語研プロジェクトレビュー』５（１）、pp.19-31、2014）で示される文字環境のモデルは、ある文字との接触によるなじみが選択要因につながっていくことを示しており、非外来語のカタカナ表記の選択要因にも適用できるものである。

２-１で提示した先行研究一覧（表１）の中には、教育の分野における論考も含まれていた。

国語教育（No.23）や日本語教育（代表的なものにNo.10、36など）の現場における、非外来語のカタカナ表記の扱い方や教授法に関するものである。このような議論の背景には、教育現場で教授される内容と、実際に観察される用例とが隔たっているという事情がある[7]。

以上2-4で述べてきた諸分野の論考においては、日本語学の分野における研究成果が参照され、引用されているのが見られる。日本語学の分野においても同様ではあるが、文字種の選択は学際的なテーマであるにもかかわらず、まだ十分に成果の相互参照がなされているとは言い難い。現代日本語における文字種選択の仕組みを解明するためには、さらに活発な交流が求められる。

3.「非外来語のカタカナ表記」がなされる要因

先行研究において指摘されてきた「非外来語がカタカナで表記される要因」は多様である。「要因」は「条件」「理由」などとも表現されている。また、カタカナで表記されることによる効果やカタカナの機能、役割も混在し、要因と似た意味合いをもって提示されている。それぞれが指し示す概念の間に明確な区別は認められない。それらを本章では「要因」としてまとめ、本稿独自の観点で分類して一覧として示す。

各項目の最後の「No.」から始まる番号は表1の通し番号であり、どの先行研究で言及されたものかを出典として示すものである。表1以外の本稿における既出文献を出典とする場合は著者の名字と発表年を示した。特に多数の先行研究で言及されている要因については、煩雑さを避けて出典を省略し、（多）と表示した。なお、似た内容のものは集約しているため、先行研究とは表現が異なる場合がある。また、ここでは、調査と考察の対象となった資料の違いは考慮せずに列挙している。複数の項目間での区別が曖昧で、さらに集約してもよいように思われるものもあるが、先行研究の記述をなるべく活かすようにした。提示されていた用例を、ごく一部であるが【　】に入れて出典の前に示す。※は筆者による補足である。

要因は、まず「非言語的要因」と「言語的要因」とに大別できる。そして、「非言語的要因」は「場」と「意識」の観点から、「言語的要因」は「意識」「形式」「表現効果」の観点から、それぞれ分類することが可能である。さらに、表現効果は「表音性を利用した効果」と「カタカナ文字やカタカナ語（外来語）の持つ特性・イメージを利用した効果」に分けることができる。

3-1.　非言語的要因

3-1-1. 場（コミュニケーションが行われる場面）

- **記事の内容・性質、話題の違い。社会面か政治面か、文化・家庭欄かなど**　No.3
- **新聞か週刊誌かなど、媒体の性格の違い**　No.5
- **書き手と読み手が限られている場であること**　No.3
- **カジュアルで軟らかい場（コンテクスト）や文章であること**　No.32、33、36、42

・**コミュニケーションが成立する場面・状況としての「コンテクスト」**　No.32、33、42
※「カジュアルで軟らかい場」に限定されない。

3-1-2．場（物理的な場）

・**筆記素材・表示素材**（看板の材質・加工技術の制約や、手書きであること、テレビの画面など）（**【皮フ】**など）　No.31

3-1-3．意識（非言語的な側面に関わる表記主体の意識）

・**手書きである場合などに筆記経済を追求する意識（【皮フ】）**　No.31
・**子どもでも読めるようにとの読み手への配慮（【ビン】【カン】）**　No.31
・**受け手との距離を縮めようという語用論的な意識**（コンテクストと連動した表記主体の意識）No.32、33、42

3-2．言語的要因

3-2-1．意識（言語的な側面に関わる表記主体の意識）

・**カタカナ表記が規範的・標準的であるという規範意識が働く語であること**（多）
例：擬音語、擬声語、擬態語、動植物名、性別、外国人の発話文中語、幼児語、
呼び名・呼び声、専門用語、化学物質、医学・衛生関係、機関・施設名、
固有名詞、電報文、事務書類の宛名、単位・数を数える語、隠語・俗語、
発音辞典やアクセント辞典における発音やアクセントを示すもの、方言
・**漢字がわからない語であること**　No.27
・**書きにくい／読みにくいと表記主体が判断した漢字や漢語であること**　No.9、29
・**公用文など公式の文体に使われない表記形式であるために、軟らかい文体で使われるであろうという意識が働く語であること**　No.3
・**表記の段階で、表記主体が前後の語句とのバランスを取ろうと考える場合**
（前後の単語がすべてカタカナであればそれに合わせるなど）　No.10、46
※文脈を考慮しようとする意識、と言い換えられる
・**ひらがな文字列内での埋没を避ける場合**（語句の切れ目を表し、読みにくさ・読み間違いを避ける）　No.3、5、9、14、17、22、23、24、29、36、43
※筆者がNo.43で提示した「文字列環境」によって生じる文字列内での埋没を避けようとする意識
・**「カタカナで書かれる」という「カタカナ表記存在感覚」が働く語であること**　No.44
・**表記主体が「基本表記」とするものであること**　No.32
・**表記主体個人における「表記の基準感覚」が働くものであること**　No.44
・**間接書記による表記行動であるため、原案者・原著者の表記に合わせようとする意識**

No.47

・**一連続のカタカナとして語がまとまるため、それにより識別性を持たせようとする意識**

※先行研究では「一連続のカタカナとして語がまとまるため、識別性にすぐれる、目立つ」点が要因として挙げられており、【デンワ】【タタミ】【マンガ】などが例示されている（No.3、31）。

本稿ではこれを「意識」を軸として捉え直し、「言語的な側面に関わる表記主体の意識」としてここに記述した。

3-2-2．形式（言語に属する側面）

・**文脈。前後に書かれている文、語句との関係**　No.10、46

・**漢字で書きにくい事情にある語である**（表外字である、漢字がない、漢字表記がやや難しいか結合度が弱い、漢字だと読み取りにくいなど）（【アゴ】【ワイロ】【ミソ】【ゴミ】【ケガ】【ボケ】【フタ】【バネ】【ネジ】【テコ】【マヒ】など）　No.1、3、9、10、14、22、24、29、31、34、41

・**漢字にすると複数の読みがある語である**（【コツ】【ツケ】【ゴミ】【ワル】【コメ】【カネ】など）　No.17、30、41、佐藤2010（注2）

・**込み入った字画を持つ字である**（【皮膚】を避けた【皮フ】）　No.31

・**カタカナ表記が普通である状況に変化してきた語である**（習慣化、慣用化とも）

※複数の先行研究で指摘されている要因であるが、「普通である状況」「習慣化、慣用化」の認定は曖昧である。筆者がNo.47で「慣用カタカナ表記」の認定方法を提案する以前に慣用化の認定基準を提示していたのはNo.17のみである。（【バカ】【ノリ】【ムダ】【ゴミ】【カ月】【カタカナ】【カッコ（括弧）】【ハガキ】【マネ】【カラ（空）】【モテる】【クセ】【コツ】【ダメ】【皮フ】など）　No.3、5、9、10、14、17、22、30、31、41

・**カタカナ表記が慣用表記である**（慣用カタカナ表記）（【カタカナ】【ケガ】など）　No.47

・**語義を理解するために特に漢字を必要としない語である**（【デンワ】【タタミ】【マンガ】など）　No.3

・**仮名表記にした場合にまぎれるような同音語がない**（同音語があっても前後の文脈によって誤解を生まずに済む）（【デンワ】【タタミ】【マンガ】など）　No.3

・**カタカナ表記の自立語基に接頭辞が引きずられる**（【オシャレ】【コギャル】など）　No.15

・**略字としての使用**（【会ギ】【名ボ】など）　No.9

・**漢字表記の代用・代行をさせる**　（【ボロ】【ハツラツ】など）　No.3、6、16

・**パソコンで表示させることができない文字である**（「秘」を丸で囲んだ文字の代わりに【マル秘】と表記するなど。読み方・音を示しているとも解釈可能）　No.11

・**カタカナ表記によって意味が独立する・漢字表記語の一種の同音異義語である**（【イケる】【スベる】【クスリ】など）　No.24、25

・**ポピュラーカルチャーに関わる語である**（【マンガ】【ツッコミ】【カワイイ】など）　No.34
・**罵倒語・非難語である**（【カス】【ワル】【ムダ】【イジメ】【ヤラセ】など）　No.34
・**語の機能（統語的・文法的振る舞い）の違いを表す**（【テキトー】）　No.37
・**音声転訛形を持つ語である**（【メンドウ】に対する【メンド】など）　No.46
・**カタカナの役割に沿ってカタカナ表記されていると一般的に見なされる語である**（オノマトペ、動植物名、俗語、専門的な用語など）　No.47
・**カタカナ表記されるにあたってコンテクストの影響を受けない語である**（オノマトペ、動植物名、俗語、専門的な用語などカタカナの規範的・準規範的な役割に沿っているもの、【カタカナ】【カラオケ】【ケガ】【ズレ】【セリフ】など）　No.47
・**品詞が名詞（一般）、または副詞である**　No.43
※名詞（一般）・副詞であることは、カタカナ表記出現を積極的に促進するとまでは言えないが、両者において出現しやすいことからここに挙げた。積極的に抑制もしないと考えられ、「品詞の中ではこの２種類に出現しやすい」という要素である。
・**外来語由来の成分を語の一部に持つ**（【カラオケ】など）　No.10、47
・**多義語である**（【モノ】【カギ】など）　No.47

3-2-3．表現効果

3-2-3-1．表音性を利用した効果

・**話し言葉的な特徴を示すため**（【ウン】【ナ～ンだ】など）　No.3、4、5、7、8、12、15、24、36
・**話し言葉そのもの・音声・発音・音を描写するため、際立たせるため**（【ガッコ】【ホント】【チョー】【ヨカッタ】など）　No.3、9、15、16、21、29、30、31、41
・**高く鋭い音／硬質系の音色を表すため**（ピアノの音色を表す【ーン】）　No.15
・**感動詞・終助詞・語気語調を表すため**（【ですョ】など）　No.3、10
・**ゴロ合わせ（掛詞）や慣用句**（【カマをかける】【コケにする】など）　No.9
・**振りがな・読み**（「近々に」に対する【キンキンに】など）　No.10、12

3-2-3-2．カタカナ文字やカタカナ語（外来語）の持つ特性・イメージを利用した効果

・**感情や感覚など情態を表すため**　（【トーゼン】など）　No.4、7、19
・**状態や性質、程度などを表すため**　（【メリハリ】【イマイチ】など）　No.12、19
・**評価を表すため**　（【メンドウ】【カンタン】【インチキ】【デタラメ】など）　No.4、7、12
・**レトリックやノリの良さを表すため**　（【カサつくホッペも、ベタつくオデコも】【ワンモアビジン】など）　No.9
・**特に強調するため**（話し言葉的な表現に限らない。見出し語等の視覚効果含む）　No.10、30、41

・**特殊な意味やニュアンス、語感をもたせるため**（【カネ】【ズレ】【モノ】【オンナ】【ラク】【キレる】【ハレ（のお祝い）】【ビミョー】【モノ】）など） No.3、5、9、10、14、21、23、24、27、29、30、36、41、佐藤2010（注２）
・**言葉や文の重み、語義や語のニュアンスを低減させるため**（深刻性・真剣味・強烈すぎるイメージの緩和）（【ショーゲキ】【運動オンチ】など） No.8、15、31
・**読み手を立ち止まらせるため** No.15
・**漢字本来の字義からの距離感を保つ・区別するため**（漢字で書かれた場合は具体的な事物を指し、カタカナで書かれた場合は具体的な事物を指さないなど）（【コツ（を伝授する）】【クビ（になる）】【（話の）タネ】【クギ（を刺す）】【（解決の）カギ】【ダシ（にする）】【アク（が強い）】【（体の）ツボ】など） No.3、17
・**漢字の第一義でない意味で用いる場合**（【オビ】【カギ】【コツ】【ウロコ】【クビ】【ノリ】【ツケ】【モテる】など） No.10、17、30、41
・**語を従来とは異なる意味や用法で使っていることを示すため**（【ヤマ】など） No.16、21

４．要因の３つの切り口と要因相互の関わり

３章で列挙した要因は複合的・重層的に関連し合っており、いずれか一つの要因のみによって非外来語がカタカナで表記されて出現するわけではない。一つの非外来語のカタカナ表記が出現するのに複数の要因が関わり合っているという捉え方は、当分野ですでに共有されている共通認識であると言ってよいであろう。しかしながら、「どのような場合に、どのような語が、どのような要因によってカタカナで出現するのか」という仕組みと原理は十分に記述し得ていない。本章では、その仕組みと原理を記述するために有益であると思われる、次元の異なる３つの切り口による要因の捉え方を提案する。

１つは、「非言語的要因」と「言語的要因」である。３章で要因を整理する際には、まずこの両者を区別して捉えた。コミュニケーションには常にそれがなされる「場」があり、その場においてコミュニケーションを行う人間には「意識」がある。これらは「非言語的要因」である。その上で、３-２-２「形式」に挙げられたような個々の言語的要因が関わる。したがって、ある表記が出現する要因はすべてが「非言語的要因＋言語的要因」という二重構造を持っていることになる。

２つには、「促進要因」と「抑制要因」である。促進要因は、非外来語がカタカナで表記されることを後押しする要素である。例えば、「漢字で書きにくい事情にある」ことや、前後をひらがなに挟まれているという「文字列環境」などは典型的な例である。一方の抑制要因は、非外来語がカタカナで表記されるにあたり、妨げとなる要素である。例えば「改まった場であること」などが挙げられる。どのような要因が促進／抑制のどちらとして作用するのか、どの程度の強さで作用するのかという力関係は、個々の用例ごとに異なる。

３つめは、「固定的要因」と「変動的要因」である。固定的要因は、語や表記に付随してお

り原則的に変化しない要素である。例えば、「名詞であること」つまり品詞は、語の属性であって個々の出現例ごとに変化するものではないため、固定的要因である。そして、変動的要因は用例によって変化する要素である。語の前後の文字が何であるかによってその都度変化する「文字列環境」は、その一つである。また、「場」などの非言語的要因は、用例ごとに異なるため全てが変動的要因である。

以上の３つの切り口で捉えた次元の異なる要因の掛け合わせによって、無数のバリエーションが生まれる。非外来語が漢字でもひらがなでもなくカタカナで表記されて出現する時、その背後では非言語的要因と言語的要因が二重構造をなして重なり合い、各々を構成する要素が促進要因あるいは抑制要因となって、両者が綱引きを行っている。促進要因は促進要因同士で、抑制要因は抑制要因同士で後押しして助け合い、促進要因と抑制要因は互いにせめぎ合う。こうして複数の要因が、カタカナ表記の出現を促す促進要因になったり抑制要因になったりしながら絡み合うという多重構造である。[8)]

そして言語的要因には、各々の語や表記に付随している固定的要因と、用例ごとに異なる変動的要因とがある。非外来語のカタカナ表記が出現する仕組みを一般化して客観的に記述するのが困難であるのは、変動的要因がその都度異なるためである。そこには表記主体の個人差も反映する。個人差には習慣、好悪なども含まれ、どの要素がどのような場合にどの程度表記の選択に入り込んでくるのかを一般化して示すことは極めて困難である。

さらには、３章で列挙した要因同士が因果関係を持って関わり合う場合もある。例えば、「略字としての使用」の用例【会ギ】（会議）の【ギ】は、「込み入った字画を持つ字である」＋「手書きである場合などに筆記経済を追求する意識」の両条件が原因としてあり、かつそこに「場（コミュニケーションが行われる場面）」が関わる。略字の使用が許容される場でなければ出現しない表記であり、手書きでなく例えばパソコン等で入力する場合は、何らかの表記主体の意図や事情がない限り出現しない表記である。この例では、「略字としての使用」は結果であり、「込み入った字画を持つ字である」と「手書きである場合などに筆記経済を追求する意識」の両条件はその原因、「場（コミュニケーションが行われる場面）」は誘因であるという関係になっている。このような、いずれかが原因となりいずれかが結果となるという要因同士の関わりも、用例ごとの出現要因の多様性を生み出している。

これが、要因相互の複合的・重層的な関わり合いによって一つの非外来語のカタカナ表記が出現する背景であり、それは用例ごとに非常に個別的なものとなる。

５．今後の展望

以上を踏まえ、「非外来語のカタカナ表記」研究における今後の展望について述べる。前章で示したように、これまでに指摘されてきた要因を３つの切り口で整理することによって、その背景の多様性を捉えることはできる。次に必要なのは、非外来語のカタカナ表記が出現するに至る仕組みと原理を、この３つの切り口を用いて記述し、説明することである。

同時に、さらなる非外来語のカタカナ表記の実態の把握が必要である。2-2-1で述べたように、現代日本語における多種多様な書き言葉の資料を、先行研究では十分にカバーしきれていない。さらに実態を把握するために、多種多様な資料の中から何に焦点を当て、調査対象としていくのか慎重に検討した上で調査を進める必要がある。

その際に考慮すべきは、近年における言語生活と文字環境の様変わりである。2018年現在、スマートフォンの普及に伴い人々が文字情報を目にする媒体も急激に変化している。スマートフォンを利用してインターネット上の文字情報を見る機会が増加し、文字情報は主にLINEやTwitterなどのSNSで見るという若者も多いのが現状である。筆者は2018年7～10月にアンケート調査を行い、日ごろどのようなメディアを通して日本語の文章や文字情報に接触しているのかを大学生209人に尋ねた。結果、1日の中で最も長時間日本語に接触するメディアとして「インターネット（携帯電話・スマートフォン）」を選択した者（92人、44.0%）が最も多く、「メール・Twitter•LINEなど」を選択した者（78人、37.3%）との合計は8割を超えた。「本・雑誌など（紙の媒体）」を選択した者はわずか8人（3.8%）であった。また、同じ調査を社会人41人に対して行ったところ、大学生同様「インターネット（携帯電話・スマートフォン）」を選択した者が最も多く、17人（41.5%）であった。2番目に多かったのは「インターネット（PC）」で8人（19.5%）であった[9]。この結果に鑑みれば、非外来語のカタカナ表記の用例を採取する際にも、インターネット上やメール・Twitter•LINEなどで使用されている文字情報に重点を置く必要があるだろう。膨大な文字情報の中から研究目的に適した調査対象を適切に選択する作業には困難も伴うものと思われるが、現代における日本語使用者の表記行動の実態を把握するには必要なプロセスである。

2-2-2で述べたとおり、当分野には意識調査が不足しているという課題が存する。これまで指摘されてきた非外来語のカタカナ表記出現要因には、推測の域を出ず、印象論にとどまっているものも多い。書き手（表記主体）と受け手、つまり生産と受容の両面から意識調査を行い、実証されていないものを裏づけていく作業が必要である。現在筆者はこれに着手しており、先に述べた接触メディアに関するアンケート調査結果はその一部である。今後、追跡調査等を行った上で結果の分析を行い、発信していきたい。表記主体に「なぜ非外来語をカタカナで表記するのか」を問うことで、何が促進要因・抑制要因になるのかを語別あるいは用例別に明らかにしていくことができると考えている。カタカナ表記やひらがな表記のイメージに関する調査も、各々必要であろう。文字環境や言語生活が変化した現在において、それらのイメージが実際にどのように捉えられているのかは明らかになっていないからである。

その他、先行研究によって「外来語以外のカタカナ表記」を表す術語や「非標準」「カタカナ」等の指し示す対象がさまざまである件に関し、術語とその指し示す対象・範囲の統一が望まれるところである。統一までは行わなくても、各々の術語が指す範囲を明確に定義して使い分ける必要がある。それにより、これまでの成果を統合して議論を発展させていくことも叶うであろう。

本稿では、これまでに指摘されてきた要因を独自に分類して示し、要因を３つの切り口で捉えることも提案した。今後はこれを基に、非外来語がカタカナで表記される際の条件（どのような場合に、どのような語が、どのような要因によってカタカナになるのか）を記述していくことが目指される。これはつまり、要因同士が関わり合う仕組みの解明であり、カタカナを含む文字種の使い分けに関する全体像を体系立てて把握することにつながる。

その過程においては、分野を越えて研究成果を相互参照し、また、当分野の研究成果を周辺分野、他分野に資するものとしていくことが求められるであろう。例えば筆者自身は表１のNo.32、33、34において語用論を用いたアプローチを試みたが、ほかにも隣接分野には日本語学の領域にとって有益な理論や手法が多々あるはずである。それらを見出し活用することで、文字種が選択される仕組みと原理に新たな知見を加えることができる。

６．おわりに

本稿では、非外来語のカタカナ表記に関する先行研究を整理し、課題と合わせて概観した。そして、これまでに指摘されてきた要因を本稿独自の観点で分類した上で、今後の展望を述べた。広く「文字・表記」に関する研究の動向は『日本語の研究』（日本語学会）等の学会誌で参照可能であるが、非外来語のカタカナ表記を対象としたいわゆるレビュー論文、展望論文に相当するものは存在していなかった。これを提示できたことが、本稿の意義である。また、本稿が提案した「要因の３つの切り口」は従来なかった捉え方であり、これを導入することで、文字種が選択される際に要因が複雑に関わり合う様相を捕捉しやすくなったのではないかと考える。

本稿では「カタカナ表記」の研究に絞って述べてきたが、大量にある「カタカナ語」「カタカナ文字」研究への目配りも当然ながら必要である。カタカナ語（外来語）やカタカナという文字のイメージは、表記の選択に関連している。これらに関する研究との相互関連の中で、非外来語のカタカナ表記についての研究も発展させていく必要があるであろう。

付記

本稿は、早稲田大学大学院文学研究科に提出した博士論文「現代日本語におけるカタカナ使用の実態とその背景」の一部に加筆修正を行ったものである。

注

1) 身近な文字資料に着目することの意義は、No.44（表１）で述べた。

2) No.7では手書きのカタカナ表記にも言及されている。また、カタカナに限定せず、文字・表記全般を対象とした研究は存在する。笹原宏之「手紙と日記における文字・表記の特徴」（『表現と文体』明治書院、2005）、佐藤栄作「ケータイと手書きの表記差―ケータイの文と

一週間後に手書きした文との比較」（『愛媛国文と教育』42、pp.31-55、2010）など。

[3] BCCWJを利用したものにも、No.37のように特定の語を対象とした論もある。こうした例は調査範囲という点では小規模と言える。

[4] これは日本語学の各分野に共通の課題である。

[5] このほか、「もともとひらがなや漢字で書く言葉なのに、カタカナで書くことがある」ものを指して「破格カタカナ表記」という術語を使用している日本語教育分野の文献もある。（陣内正敬「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化＝語言与文化』11、p.53、2008）

[6] 筆者自身は、既発表論文のうち表１のNo.32、33、42〜45においては術語として「非標準的なカタカナ表記」を用いていた。その定義は「外来語以外がカタカナ表記されたもの」であり、「非外来語のカタカナ表記」と同義であった。その後、No.48では「非外来語のカタカナ表記」を用いた。No.48で論じるにあたっては、外来語か非外来語であるかが重要な視点であったためである。本稿でも「非外来語」を使用している。「非標準的」と言う場合の「標準」の基準が学界で定まっていない現状に鑑み、今後は術語の解釈にブレが出にくい「非外来語のカタカナ表記」を使用するつもりである。

[7] 筆者のNo.45（表１）は、そうした事情を踏まえて、日本語教育で早期に非標準的な（非外来語の）カタカナ表記を取り上げる意義を論じたものである。

[8] カタカナ表記の出現が抑制されると、漢字あるいはひらがな表記が出現する。つまり、ある文字種の出現を抑制する要因は、ほかの文字種の出現を促進する要因になるという関係性である。

[9] 本調査結果は、愛知淑徳大学平成30年度研究助成を受けて実施した「非外来語のカタカナ表記に関する意識調査」（特定課題研究18TT31）の一部である。本調査は、愛知淑徳大学人間情報学部倫理審査委員会の承認（2018年７月５日付、2018-007）を受けて実施した。非外来語のカタカナ表記に関する意識調査の結果については、稿を改めて報告する。